

# 第7回 「日本語大賞」

わたし      つか      ことば  
テーマ「私が使いたい言葉」



中学生の部 優秀賞 受賞作品

あっぱれ。あっぱれじゃ。

岡山県

岡山県立倉敷天城中学校

3年 篠原 亜実

あっぱれ。あっぱれじゃ。

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 三年

篠原 亜実（しのはら・あみ）

「めっぴね。めっぴねじゃ。」

私のおじいちゃんは、いつも嬉しそうにこう言います。私は、その嬉しそうに優しく笑うおじいちゃん的笑顔を、ぼーっと見ているのが大好きです。

このあいだ、弁論大会で最優秀賞をもらったことをおじいちゃんに伝えたときも、やっぱり「わしの孫じゃけんのお。あっぱれ。あっぱれじゃ。」と、何度もそれを繰り返しました。いつもは何とも思っていなかったけれど、そのとき初めて、「あっぱれ」の意味が気になりました。嬉しそうに笑うおじいちゃんに、私は聞きました。「あっぱれって、どんな意味なん？」と。するとおじいちゃんは、私の目をじっと見つめてこう言いました。

「おみじとじゃ。よくやった。すばらしい。そんな意味じゃと思っで。よお知らんけどな。意味なんか何でもないんじゃ。嬉しいって思ったときに、あっぱれ、あっぱれって言葉がでてる。心の底から湧いてくる言葉なんじゃ。」

そう話すおじいちゃんの優しい目は、とても嬉しそうでした。それとは裏腹に、何かを伝えようとする真剣な光がその目にあつたように見えました。おじいちゃんは何を伝えたいのだろう。そう考えているうちに、「心の底から湧いてくる言葉」このおじいちゃんの言葉が、私の心に、ずっしりとした重みと、心地の良い温かみをつくりだしました。それはきつと、おじいちゃんが伝えたいことが私にも分かった、伝わったんだ、という喜びと、その言葉がもつ大切さだったのだと思います。

おじいちゃんの「あっぱれ」は、頭でねちねち考えて作りだした言葉ではなく、おじいちゃんの心が勝手に創り出したもの。つまり、心の底から湧いてきた言葉でした。それは、おじいちゃんの喜びが創ったものはずなのに、不思議と、私の心に喜びを創り出していました。さらに、またおじいちゃんの「あっぱれ」を聞きたい。という思いから、また次もがんばろう。という私の闘志をも創り出しました。おじいちゃんの心の底から湧いてくる言葉は、私の心を動かしていたのです。おじいちゃんが本当に伝えたかったのは、このことかもしれない。私はそう思いました。

賢くて頭のイイ人は、あれこれ考えて作った言葉でヒトの気持ちを揺さぶることができるでしょう。でも、そんなことをしなくても、心の底から湧いてきた言葉を、素直に伝えることで、ヒトの心を動かすことができるのです。心の底から言葉が湧いて出てくることなんてない、そう思う人がいるかもしれません。でも、きつとそれは違います。相手から良く思われたい、そんな気持が大きすぎるばかりに、心にふたをしまっているに違いないからで

す。本音を言い合ったり、心からバカみたいに笑い合える友人や恋人をつくりたい。みんなそう言うくせに、心はふたをしまってしまっているばかりに、素直に気持ちを伝え合うことができませぬ。相手に良く思われるための言葉、相手に気に入られるための言葉も大事かもしれないけれど、心の底から湧いてくる言葉を伝えられないのに、本音を言い合ったり、心から笑い合える関係をつくることはできないのではないのでしょうか。心のふたをはずして、自然と湧いてくる思いを、素直な言葉にのせて伝えてみると、案外、気持ちが良いかもしれません。相手も、その言葉を素直に受け入れてくれるでしょう。心の底から湧いてくる言葉は、ヒトの心を動かすのです。

素直な言葉だけでは生きていきづらいのが社会かもしれませんが、それでも私は、心の底から湧いてくる言葉を大切に、それを上手に使って生きて行きたいです。おじいちゃんが私にしてくれたように、ヒトの心を動かせる人間になるために。